

技術・家庭科（技術分野）の主張

1 教科で育みたい人間像

私たちを取り巻く生活環境は、日進月歩の勢いで進む技術革新や、さまざまな社会問題（少子高齢化・待機児童）に伴うサービス形態の多様化といった要因により大きく変化しています。

このような生活スタイルの変化は、先人たちが知恵を出し合い、便利さや快適さを求め、豊かな生活を生みだしてきた歴史そのものと言えるのではないのでしょうか。私たちの考える「豊かな生活」とは、誰もが暮らしやすい生活のことです。そして、そのために大切になるのが「自分と他者のた

めに便利にしたい」という目的意識にあると考えます。つまり、今の生活を見直しながらも、今後、自分たちがどのように生きていくのかを想像し、よりよいものを構築していくことが求められている社会に子どもたちはいるのです。

そこで、自分たちの生活に直接かかわることの多い、技術・家庭科では、新たな時代を切り拓くとともに、環境の変化にも柔軟に対応できる人になってほしいとの願いから、「豊かな発想でよりよい生活を創りあげる人」を育みたいと考えます。

2 私たちが大切にしたいこと

「豊かな発想でよりよい生活を創りあげる人」を育むために、技術分野では、ものづくりを通して『豊かな生活を形にしていきたい』と考えます。

本来ものづくりとは、「自分を含めた他者の現在と未来を豊かにしていく」という目的意識をもって創造していくことと考えます。ですから、自分のためだけの視点で考えたものづくりでは、豊かな未来へつながるものとは言い難いでしょう。つまり、形にする際には、“誰にとっても”の視点を込めて作られていくべきだと考えます。このように、多くの視点をもって創られたものは、自分と仲間の考えを重ねて創造したものであり、それこそが豊かな生活を形にしたものと考えます。

また、ものづくりの過程においては、何度も失敗することが予想されます。そのような失敗を通して、予め失敗を想像できたり、失敗することも含めた計画を立てたりする（見直しをもつ）ことができるようになるでしょう。実際にやってみたらこそ分かったことは大きな経験となり、さらに「どうすればもっとよいものができるのか」という思いを抱いていくでしょう。この経験が「材料選択（設計）」や「組み合わせ（製作）」について問い直すこととなり、“想像”と“創造”の循環が行われていくと考えます。このようなことを意識してものづくりを行っている子どもたちこそ、『豊かな生活を形にしている』の姿と言えるのではないのでしょうか。

そこで技術分野では、子どもたちが「明確な目的意識をもって、ものづくりに取り組む姿」が見られる授業を構想していきたいと思えます。この

姿は、仲間の考えを確認したり、他者の目線で評価したりする姿となるでしょう。

授業でこのような姿が見られるために、一人一人が目的意識を明確にできるように、製作前のかかわりを大切にしたいと考えます。それは、「いつ、どこで、だれが、何のために（使うのか）、なぜ（必要なのか）、どのように（活用するのか）」といった具体的な視点をもつことであり、未来像をはっきりさせることでもあります。この目的意識を自他共に共有していくことが、ものづくりにおける視点を広げることに繋がっていくと考え、仲間と考えをすり合わせていく場を設定していきたいと思えます。

このような事前のかかわりに加え、製作段階においては、自分自身で実践して試す機会を大切にしたいと思います。なぜなら、実践の中でこそ、驚きや納得を伴う、本当の意味での技術のすばらしさを実感できるからです。実践することは創意工夫することや試行錯誤することと関係してきます。創意には、ゼロから何かを創ることだけでなく、既知のものを再構成したり、援用したりするということも含めて捉えます。また、さまざまな視点から工夫していく機会を十分に確保することで、迷いながらも自分の思いをもって挑戦し、技術的なものの「見方・考え方・捉え方・感じ方」が獲得されていくでしょう。それが生活の基盤となり、『技術』の本質に迫ることにつながると考えています。また、仲間と失敗を恐れず挑戦していくことから、「自分たちで創りあげた」という喜びを共有できると考えます。